

史遊会通信

NO. 183
平成22年
1月15日
発行

事務局
03-3712-0651
下山田方

十一月講演要旨

ソーシャル・ビジネスについて

三戸岡道夫

ソーシャル・ビジネスは「社会的事業」ということであるが、一般的には、

(社会の役に立つ事業)

(社会のためになる事業)

という、広く社会問題に取り組みビジネスのことをいう。しかしまだ歴史も浅いので、広く公共事業や、企業のCSR(企業の社会的責任)、慈善事業などが含まれて論ぜられる場合もある。

しかしここではそのような広範囲のものでなく、もっと焦点を絞った経営事業体としてのビジネス、具体的にはバングラデシュのムハマド・ユヌス(二〇〇六年ノーベル平和賞受賞)〈六十七歳〉が経営するグ

ラミン銀行などを中心とする、新しい資本主義ビジネスのシステムにポイントを当ててお話ししたい。

ムハマド・ユヌスのソーシャル・ビジネスは、これまでの自由市場主義、株値至上主義の企業運営に対し、

(配当をしない株式会社)

という新しい株式会社システムによって、「社会への貢献」を実現するものであり、行き詰った二十一世紀の資本主義の新しい突破口として期待されるものである。

バングラデシュは世界でも最も貧しいクラスの国である。

例会のお知らせ

◎ 1月総会

日時 平成22年1月27日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

議題 *前年度事業報告

*同 会計報告

*22年度事業計画

*その他

総会終了後例会

講演 森下征二氏

テーマ 未定

◎ 2月例会

日時 平成22年2月24日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 平山善之氏

テーマ 未定

自由執筆は隆恵・中山喬央・鍋屋

次郎の諸氏。

ムハマド・ユヌスはそのバングラデシュに一九四〇年（昭和十五）に生れた。生れたのはバングラデシュ南東部のサッタゴンである。サッタゴンは人口三百万人の商業都市で、バングラデシュで最も大きな港を持っている。

ムハマド・ユヌスはバングラデシュ首都にあるダッカ大学、アメリカのバンダービルド大学を卒業して経済学博士となった。そして一九七二年（昭和四十七）、三十三歳のとき帰国して、チッタゴン大学の経済学部部長になった。

ところが、帰国して二年目の一九七四年（昭和四十九）、三十五歳のとき、バングラデシュは大飢饉に見舞われた。

もともとが貧しい国であるところへもってきて、大飢饉である。その惨状は目をおおうばかりであった。その様子を見るにつけ聞くにつけ、ムハマド・ユヌスは、もう大学で経済学を教えている時ではない、何か役に立つことをしなくてはならない、そう決意すると、救援活動をしようと近くのジョブラ村を訪れた。

その惨状はすさまじく、人々は飢えに苦しみ、目の前に餓死者が倒れていた。

すると高利貸しから金を借りて、苦しんでいる一人の女性がムハマド・ユヌスの眼にとまった。彼女は竹の椅子を編んで、生活を支えていたのであるが、高利貸しから金を借りたばかりに、その高金利に苦しめられて、生活が破綻していた。

その惨状をわかりやすく説明すると、彼女は一ドルで竹を買ってきて、それを竹の椅子に編み、市場へ持って行って、四ドルで売る。その差額三ドルで生活している。

ところが高利貸しから金を借りる条件が、「出来た椅子を高利貸しが二ドルで買う」という条件なのであった。高利貸しはその椅子を市場で売って二ドル儲けるが、彼女のところには原材料費を差し引けば一ドルしか残らないのである。これでは生活もろくに出来ないし、ましてや借金も返せない。永久に高利貸しの奴隷である。

（これはひどい。なんとかしてやらなくてはならない）

とムハマド・ユヌスは思った。そして、そのような女性が他にいないかと調べてみると、ちょっと調べただけでも四十二人もいた。その四十二人が借りている借金の合計が二十七ドルという金額であった。

ムハマド・ユヌスは直ちに自分の金二十七ドルを彼女たちに貸し、それで高利貸しからの二十七ドルを返済させた。

彼女たちはやっと借金地獄から解放された。そしてこれがグラミン銀行のスタートになったのである。すなわちグラミン銀行は貧しい女性を救うためであって、金儲けが目的ではないのである。

貧しい人々に金を貸す時ネックになるのは、彼女たちには担保もないし、保証人もいないし、確実に返済出来る目途がないことである。

その為にムハマド・ユヌスは彼女たちに五人ずつのグループを作らせ、そのメンバーの一人として貸すという形にした。すると彼女たちは、もし借金を返さないと他のメンバーに迷惑をかけるので、絶対、返さないということがないのだ。た。一メンバー同志の間には法的な拘束力はないのだが、精神的なプレッシャーが働くのである。

この結果、グラミン銀行での返済率は九十八パーセントと、驚異的な数値を示している。これに対して一般の健全を誇るバングラデシュの銀行の返済率は六十五パーセント前後とのことである。

グラミン銀行の営業の特色の一つは、グラミン・レディである。グラミン銀行の営業は普通の銀行のように、銀行の支店を作り、そこへ客がやってくる、という形ではない。その逆のやり方をやっている。支店は作らない。客は銀行へ来ない。その代わりに、銀行の方から銀行員が客の方へ出掛けて行って仕事をやる。それがグラミン・レディである。

金を借りた五人ずつのグループは集合する日と時間が決っていて、その時になると、五人は自分たちの決めた場所に集まる。そこへグラミン・レディが行つて、五人の人々へ貸出しや返済の事務をやり、また、いまやっている仕事の状況を聞いたり、アドバイスをしたりする。そして、そこが終ると、次のグループを訪れるのである。

このようなムハマド・ユヌスの貧しい人々への思いが、次は子供たちが食べるヨーグルトへと向っていくのであった。貧しい国のバングラデシュの子供たちは、栄養が足りない。せめてヨーグルトを安い値段で作って、子供たちに食べさせてやりたい。そう決意したムハマド・ユヌスは、ヨーロ

ッパのある食品会社と提携して、ヨーグルトを作る会社を作ったのである。もちろん、これはヨーグルトを作つて儲けるための会社ではない。会社は儲からなくていい（もちろん、赤字ではないけな）が、バングラデシュの貧しい子供たちに、安い値段でヨーグルトを食べさせるのが目的である。

そのためにムハマド・ユヌスは普通のヨーグルト会社とは逆のやり方をした。普通の会社であると、まず大きい敷地に大きい工場を立て、ヨーグルトを大量に作る。すなわち大量生産規模のメリットを追求する。そして大きい冷凍室を作り、多くの冷凍車で各地に運ぶ、大規模集中方式である。

しかし、ムハマド・ユヌスはその逆、すなわち小さい工場を各地にいくつも作る方式をとった。それは、その方が安くヨーグルトが出来ることと、地域との密着が出来るからである。

ヨーグルトはその鮮度が必要である。そのため一般には冷凍庫という大設備が必要であり、ヨーグルトを運搬する多くの冷凍車が必要である。しかし、各地に小さい工場を作つてその周辺に住む子供たちが食べれば、冷凍庫も必要ないし、冷凍車も必要

ないわけである。それだけ設備費が少しくすみ、コストダウンになりヨーグルトが安く出来るわけである。そしてヨーグルトを運ぶのに、車ではなく、グラミン銀行のグラミン・レディを使った。

グラミン銀行は営業各地を訪問するグラミン・レディを大勢使っている。グラミン・レディは毎日各地の客（借り手）の所を訪問するのであるから、同じ地域の子供へのヨーグルトを彼女たちが持つて行って配るのである。これは非常にいい方法である。また、各地にはグラミン銀行から金を借りて、牛を飼っている人もいる。ヨーグルトの原料となる牛乳をその人々から買えば、安く買えるしまた、グラミン銀行の客で、牛を飼つて暮している人々の、日営業の助けになる。

このようにしてムハマド・ユヌスはバングラデシュの子供たちに安いヨーグルトを食べさせる事業に成功したのであるが、この会社の目的は、ヨーグルト事業によって儲けようとしたのではない。貧しい子供たちにヨーグルトを食べさせるのが目的である。だからこの会社は株式会社であるけれども、利益を出さないののである。

ということ、株主に配当をしないのである。配当する金があれば、ヨーグルトの値段を下げるように使うのである。

(配当をしない株式会社)

これがムハマド・ユヌスの行うソーシャル・ビジネスなのである。

しかしそのように配当もしない株式会社に出資する人間がいるであろうか。

ところが実際にはいるのである。

人間には、金を儲けたいという欲望と、世の為、人の為になりたいという気持の両方がある。もちろん、人間であるから前者の方が強いであろうが、後者の気持も少しはある。現実にも、ユニセフとか、ボラン

ティア活動など種々の慈善事業が行われている。貧しい人を復活させるための事業であれば、配当のない株式会社へ投資する人はいるのである。そして事実、ムハマド・ユヌスは実践によって、それを証明しているのである。

したがって株主総会においては、如何に利益が出たかという説明よりも、その期間中、いかに世の中のために尽した事業をしたかというその内容を充分説明しなくてはならない。ヨーグルト会社であれば、ヨーグルトを何十万個作り、何万人の子供が安くおいしいヨーグルトを食べたかという、具体的な説明である。

株主は少しばかり高い配当金を受取るよりも、その善意の事業の内容に満足するのである。そして株主総会の席上で、五十人ぐらいの子供たちが並んで、

「おじさん、おばさんたちのお陰で、わたしたちは沢山のヨーグルトを食べることが出来て、ありがとうございます」

とペコリと頭を下げれば、これ以上の配当はないであろう。

拜金主義の暴走によって破壊された世界経済を立ち直らせ、世界の貧困層を救う有力な経済システムの一つが、ムハマド・ユヌスのこの新しいソーシャル・ビジネスである。

自由執筆

「目白の女子大学」周辺を

読む (一)

山本 鎮雄

○江戸の場末

上記の目白台の、Aの地域(旧大名下屋敷)、Bの地域(旧武家屋敷や組屋敷)の他、Cの地域を歩いて印象に残るのは、道

路が曲がりくねり、町並みが雑然とし、大小の住宅が不規則に混在していることである。この地域はスプロール化、つまり町人が畑地に虫食い状態で無秩序に拡大したのである。目白通の北東側と不忍通の北西側が「雑司ヶ谷」である。その地名は時代によって雑式谷、蔵主ヶ谷、僧司谷などと一定していなかった。八代将軍吉宗がこの地に来着した時、地名があまりにも「混

雑」していたため、「混雑之雑之字相用可」との意があつたという(『御府内備考卷五十二』)。

「絵図」を見ると、雑司ヶ谷は不忍通沿いに「百姓町」と畑、武家屋敷が混在し、目白通沿いには商人や職人が住む「町屋」(町人地)、さらに鬼子母神の参道沿いにも門前町、茶屋町の「町屋」があつた。鶴屋南北の代表作『東海道四谷怪談』はお岩

さんの幽霊で知られているが、それは江戸の巷間の伝説や実話を素材にしている。とくに不倫の男女が一枚の戸板の裏表に釘づけにされ、神田川に放り込まれた実話は、神田川の取り水を常飲する江戸住民にとって不快感をこえ、吐き気をもよおし、大いに江戸市中の話題になったことであろう。

四谷怪談の第二幕の場は「雑司ヶ谷四ツ谷町」の民谷伊右衛門浪宅である。「絵図」では雑司ヶ谷には「四ツ谷町」という町名はないが、町人地に「四家町」という町名が記載されている。「四軒之家」があったために「四ツ家町」と名づけられた。雑司ヶ谷「四家町」の一軒が傘張りの内職で糊口をしのぐ伊右衛門浪宅である。

不実の伊右衛門は貞女のお岩に毒を盛る。その醜さと夫の裏切りからお岩は自害。さらに民谷家に伝わる家宝の秘薬を盗んだとして小者の小仏小平を惨殺した。伊右衛門は間男心中に見せかけるため、「世間へのみせしめ二人の死がい、戸板へうちつけ姿見の、川へながして」すぐに水葬を計画する。姿見橋がかかる川は「神田川」で、江戸市中の「上水」だった。

雑司ヶ谷は鬼子母神の門前町、茶屋町、

町屋、百姓町、畑地が混在し、さらに職人や商人の町人地のなかには「四家町」がある。ところが、雑司ヶ谷の町人地は神田、日本橋、京橋などの第一次「下町」の町人地（江戸最大の商業センター）とは大いに異なり、「大江戸八百八町」の外縁であつて、その日暮しの物売り商人、日雇い職人、伊右衛門のように内職で糊口をしのぐ浪人が住む「江戸の場末」の一つである。

○光と影の都市空間

伊右衛門の悪党どもは夜陰に乗り、戸板に張りつけた二体の死体を浪宅から運び出し、繁った樹木のために昏なお暗い、俗に言う「くらやみ坂」を下って神田川の姿見橋から放り込んだ。この坂は「宿坂」と言うが、神田川に下る途中に金乗院と南蔵院という寺院がある。高田村砂利場にある南蔵院は、徳川将軍の鷹狩りの休息地だが、幕末から明治期に活躍した落語家の三遊亭円朝の「怪談乳房榎」の前半の舞台である。ここでは、その詳細は省略するが、雑司ヶ谷の町家、そこから神田川へと下る途中の南蔵院は、偶然にせよ、江戸期の代表的な怪談話の舞台である。

それは江戸期の場末として、影の部分

象徴しているからであろう。しかし影があつてこそ光を認識することができる。実は、「音羽雑司ヶ谷」は江戸市中の武士・町人の「ケ」から解放された「ハレ」の世界でもある。江戸の場末とは言え、日帰りピクニックの格好なコースとして、光が照射する名所が散在した。霊験あらたかな雑司ヶ谷鬼子母神、徳川五代将軍家綱が庇護した神霊山護国寺、三代将軍家光によって建立された目白不動の参拝がそれである。護国寺を参拝し、参道の音羽町を通過して帰路についたのであろう。

ところが、この音羽町には数多くの遊女屋（岡場所）があつた。江戸後期の「絵図」にはこの遊女屋は記載されていないが、今や音羽通沿いは出版街の高層ビルが乱立している。私はビルの谷間に飲み屋街の小さな横町を発見した。かつてはその周辺に遊女屋があつたのであろうか。鬼子母神参詣土産の玩具として、人気があつたのが五色の「風車」だった。当時の川柳には「帰り道、急げば廻る風車」「風車わるく廻ると泊まりがけ」とある（『新編若葉の梢』）。この川柳は、参詣人が「帰り道」に音羽町の遊女屋に泊まる光景を描いたのであ

う。もつとも、この遊女屋の繁栄は一時的
 だったらしい。

○シンボルとしての都市景観

目白台周辺の街歩き、タウンウォッチン
 グは格好な舞台である。なぜなら、江戸か
 ら現代にいたる歴史の変容を物語る「都市
 景観」をかいま見ることが出来るからであ
 る。ある景観観察学のパイオニアは東京を
 街歩きし、「整然と敷地割りされた計画性
 の強い都市組織」と「地形に順応した不整
 形な都市組織」に分類した。この二種類の
 「都市組織」は、はからずも、目白台周辺
 に観察することが出来た。

私が住んだ第二次「山の手」の荻窪は、
 「地形に順応した不整形な都市組織」だっ
 た。今、住んでいる第三次「山の手」、小
 金井の旧梶野新田は道路の状況を見ると、
 「整然と敷地割りされた計画性の強い都市
 組織」である。ただ、敷地の規模で言えば、
 梶野新田の草分け百姓の遺産をそのまま相
 続した住民の敷地は広く、来住者・新来住
 者の敷地や家屋はますます狭くなっている。
 目白台周辺に限らず、人々が生活する「都
 市空間」(あるいは「都市景観」)はそれ
 自身で「意味」をもつのであろうか。

たしかに「環境」や「立地」の善し悪しは
 日常生活に直接的な意味をもつであろう。
 しかし「都市空間」がハイマート(故郷)
 として意味をもつのは、そこに生きた歴史
 の変容と生活者として「人生の意味」を主
 体的に問いかける場合であろう。そうでな
 ければ、「都市空間」は、人生の通り過ぎ
 るただのプラットホームにすぎず、人生に

自由執筆

軍艦「甲鉄」について

由利 潤一

明治維新の頃のことを調べていると、十
 九世紀末欧米諸国でも諸事まだ発展段階で
 あったことに気がつく。海軍も嘉永五年ペ
 リーが来航したときは、蒸気船と帆船の混
 成艦隊で、蒸気船も外輪船であった。その
 後、英仏で木造船を装甲板で覆った甲鉄艦
 が開発された。ここに日本初の甲鉄艦を巡
 る挿話がある。

南北戦争中、南軍がフランスに発注した
 ストーンウォールという甲鉄艦を北軍が接
 収した。戦争が終わると米国はこの艦の売

「意味」を与えるシンボル(象徴)となり
 えない。街歩きを楽しくさせるのは、「都
 市空間」に「意味」を与える我々自身の姿
 勢であり、問題関心であろう。

目白台の街歩きは、ただの人生の通過駅
 ではなく、ハイマートとして私に「人生の
 意味」を与えてくれた。

却を考えた。

海軍の拡充を急いでいた徳川幕府は、か
 ねて軍艦、兵器購入のために駐日アメリカ
 公使に八十万ドルもの現金を渡していた。そ
 の金額の中から「富士山」と名付けられた
 軍艦を受け取っていたが、まだ四十万ドルほ
 どの残金があったので、慶応三年に勘定吟
 味役小野友五郎を使節として渡米させ、交
 渉の結果このストーンウォールを購入する
 ことに決めた。厚い装甲を施し、アームス
 トロング砲やガトリングガンなど、新鋭兵
 器を搭載した甲鉄艦が幕府海軍に加われば、
 大いに威力を加える筈であった。

ところが、引渡し条件に従い、日の丸を
 掲げて回航されて来た同艦が、横浜に着く
 と同時に星条旗を掲げて、幕府への船の引

渡しを拒否した。

これは英米仏など諸国が、明治新政府と当時函館を占領していた旧幕軍の一部との間の戦いには、中立の立場をとることに決めていたためである。

その後の交渉で同艦は新政府側に引き渡されることになり、「甲鉄」と名付けられた。函館の榎本艦隊はこれを残念に思い、奪回作戦を行った。これが宮古湾海戦と呼ばれるものであった。

明治二年三月、榎本艦隊は「回天」「蟠竜」「第二回天」の三隻を、新政府軍艦船が終結していた岩手県宮古湾に送った。故障などのため、実際に宮古湾に入ることが出来たのは、三隻のうち土方歳三ら斬込み隊が乗り込んでいた「回天」一隻であった。三月二十五日早晩、米艦を装い、宮古湾に入った「回天」は「甲鉄」に近寄り、星条旗を降ろして日の丸を掲げ、同艦に砲撃を加えたが、厚い装甲に阻まれ、損害を与えることが出来なかった。そこで、船首から「甲鉄」に乗りかけた。「回天」の甲板が相手の甲板よりかなり高くなってしまったが、元新撰組隊員ら斬り込み隊が「回天」から飛び降りて船の奪取を図った。けれど

もガトリングガンを装備していた「甲鉄」には敵わず、「回天」艦長以下十九名の戦死者と三十数名の負傷者を出して奪取に失敗した。「甲鉄」側の戦死者は八名であったという。

「回天」は副長の指揮で港外に逃れることができ、函館に戻れたが、遅参した「高雄」(第二回天)は官軍に追跡されて座礁、捕獲された。この後榎本艦隊は函館湾海戦で全滅し、戦いは終わる。

ストーンウオール購入の使節に、通訳として同行した福沢諭吉は、そのいきさつを『福翁自伝』に次のように書いている。「丁度船の日本に着いたのは王政維新になってから、即ち明治元年であるが、そのことについて当時新政府の会計を司っていた由利公正さんに会って後に聞いたところが、ドウもあのとき金を払うのには誠に困った、明治政府には金が無い。ドウやらこうやらヤット何十万弗こしらえて払ったという話を私が聞いて、ソレは大間違いだ、マダ幾らか金が余って彼方に預けてある筈だと言ったら、そうかと言って由利は大層驚いていました。どこにドウなったか、二重に金を払ったことがある。アメリカ人が取る訳

はない、どこかに舞い込んでしもうたに違いない。」

明治新政府は、この件どう処置したのだろうか。
(友の会)

事務局だより

あけましておめでとうございます

※一月は年一回の総会です。会の動静を知るためにもぜひご出席ください。

なお、総会終了後は通常の例会です。

※本年二月には史遊会の四冊目のエッセイ集が出版され、三月には出版記念会も開催される予定です。出版記念会には皆様多数ご参加くださいますよう、お願い致します。

※一月は前期会費の納入月です。会員の方は九千円お納め願います。

※エッセイ集執筆の皆様へ

エッセイ集を出版社から個人へ送ってもらいたい方は、その氏名・住所、コメントを入れる場合はその文面、同封の短冊を使う

場合は必ず著者名を書いて事務局へ提出して下さい。短冊が必要な方は枚数のご連絡

を。送料は個人持ちだそです。

自由執筆

よみがえる古代製鉄のムラ

柴田 弘武

二〇〇九年十月二十四日、表題のテーマで埼玉県埋蔵文化財調査事業団主催の遺跡見学会が催された。場所は埼玉県伊奈町小室にある大山遺跡で、県立がんセンターの構内である。ここは一九七二年にがんセンター建設に伴う事前調査で発見された遺跡で、一九七五年の第四次調査までの分が、故長谷川熊彦教授の『わが国古代製鉄と日本刀』に発表されている。それをもとに私は「伊奈町小室・別所」という小論を書かせてもらったことがある（『全国「別所」地名事典』上 所収）。今回その発掘調査が今も続けられていることに驚くと共に、発掘現場をこの目でみて見たいと思ひその見学会に参加した。

現地でも有数の古代製鉄遺跡です。これまで19基の製鉄炉が調査され、今回、新たに5基の製鉄炉と2軒の鍛冶工房跡、谷部に広がる粘土採掘坑や廃滓場などが発見

され、鉄作りの様子がさらに鮮明になってきました。

遺跡は、古代武蔵国足立郡稲直郷に属していたと推定されます。当地は、起伏に富んだ地形で、森では炭を焼き、川では砂鉄を採り、谷からは粘土を採掘し、鉄作りに最適な場所、まさしく「たたら場」として栄えた遺跡といえます」と書かれています。

第四次調査の段階では九世紀後半から十世紀の遺跡とされていたが、今回の発表では八世紀後半から始まっていたという。また未発掘の遺跡が相当多数あるとのことであつた。同時代で、これだけの大規模な製鉄遺跡は東日本では千葉県の新東京国際空港遺跡と福島県の相馬地方の製鉄遺跡ぐらしかないのでなかろうか。私は千葉県や福島県の製鉄遺跡は、いわゆる蝦夷、征伐、に關わる国家事業と考えているのだが、この遺跡はいかなるものであつたのだろうか？

現地では、堅型製鉄炉のよく形の残った基部、鍛冶炉、ふいご座跡等を間近に見ることができたし、出土した鉄塊系遺物、炉底塊、羽口、金床石、鑄型なども展示されていた。

律令時代の武蔵国足立郡といえは、神護景雲元年（七六七）に足立郡人丈部直不破麻呂が武蔵宿禰という姓を貰い、武蔵国造（この国造は大化前代の国造と違い、その国の祭祀権を司る）となつたこと、またその一族と思われる足立郡の采女、掌侍兼典掃の従四位下武蔵宿禰家刀自が延暦六年（七八七）四月十一日に死去したという『続日本紀』の記事が思い起こされる。さらには十世紀初めの平将門の乱で名前の出る足立郡司武蔵武芝もその子孫とみられる。足立郡司の居宅はさいたま市竹鼻町にある武蔵国一之宮氷川神社の辺りであつたと想定されている。ここには竹芝寺という寺もあつたという。竹鼻町は大山遺跡の南七キロになるが、当時は後に見沼と呼ばれる広い沼地が兩者の間にあつたはずで、水路が縦横に通じていたと思われる。私は大山製鉄遺跡を管理運営していたのは足立郡司ではなかつたかと考える。足立郡司の財政の重要な一端を支えていたのはここで作られる製鉄品ではなかつたか。

この地の製鉄が「征夷」と關係があつたか否かはまだ何とも言えない。